
唄って踊って戦えるヴォーカロイドでレーヴァテイルな歌姫になりたい。

ぴえろ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唄って踊って戦えるヴォーカロイドでレーヴァテイルな歌姫になりたい。

【Nコード】

N5646Q

【作者名】

ぴえろ

【あらすじ】

タイトル通りの突発ネタ。つい思わずカツ、となってやった。

(前書き)

※以下の作品は作者の突発的な妄想及び自己満足で出来ています。
それでも良いという方はどうぞ。

「おめでとうございます！ 貴方は転生の資格を手に入れました！」
「――神様、乙」

いきなりハイテンションで目の前に表れた少女に対して思わずこ
う言ってしまったが悪くないだろう。宙に浮いてるだとか、恐らく
神々しい（笑）オーラ、見方によっては禍々しいとも取れるオーラ
を放つ眼前の相手。なるほど、俗に言われる転生神と言うべき存在
であろう。

転生神、と勝手に呼ばせて貰っているが、奴らの特徴としてはそ
の性格が酷く楽観的、というべきか自らが楽しければそれでいいや、
と考える奴らだったり、超絶なまでのドジ子だったり、何かし
ら他人に損害を与えるのが大好きな神様だ。なんというはた迷惑な
のか。いっそのまま死にたい。文字通り転生なんぞしたくない、
ああ、鬱だ。：しかし、一つだけ気になる事がある。

「：で？ 神様（笑）さん？」

「その後ろの（笑）は余計ですよ」

「メタだな神様。：さっき転生の資格を手にいれました、って言っ
てたけど、それってどういう意味？ 自分、特別に何かした訳じゃ
ないんだが」

「そうですね：それについてはとても悲しい私たちの現状を話さな
ければならない訳です」

そうして語られた話は以下の通りだ。

いつから流行だったのかは知らないが、転生もの、というのは神様が元にされている以上、とても彼らの目を惹くものだったらしい。そして「なら俺がやってやんよ」という神様が続出。しかしそれが神様の世界ではお咎めになってきたらしい。

何でも「お前等馬鹿なの？ 頭沸いてるの？ 輪廻の輪乱すとか過労死させたいの？」と最高神とも言える神様がキレたらしい。まあ、そこら辺の神様事情なんて知りたくもないが。

まあ、とにかく転生には色々制限がかかってしまった訳だが、反発も大きくストライキをするまでに問題は広がり……どうでも良いことで社会問題までに発展するのか。恐ろしい、なんて恐ろしいんだ神様（笑）の世界。

ともかく、それで最高神と「転生促進会の友」の神様達による協議の結果、転生をさせるにはある条件を満たしたものが許される、という話だった。

「で、私が転生させていいのはですね！」

「転生させていいのは？」

「トイレでトイレットペーパーが無くて、「紙がねえ…はっ、まさか紙だけに神様の仕業か!？」と言った人にだけ転生の資格を与える事が出来るのです!! 貴方は間違いなく一言一句言いました！」

私、感激です!!」

「――アホだ…こいつ…!!」

そう。ここはトイレ。そう、トイレだ。自分はそこで洋式トイレの上で下半身を隠すように座っているのだ。なんという拷問だ。羞恥心がマッハだ。マジでこの神様外道過ぎる。っていうかなんだその巫山戯た条件は。マジで死ね。

「いやあ、実を言うんですね、条件が厳しい、限定的であるほど、神様パワーをどこまで使って良いのか上限も出来てしまてですね。更に付け加えると、転生ものを知っている、転生願望がある人に限り、という条件もついてますよ?」

「……………」

…あー、うん。否定出来ない所が痛い。いや、だって好きだしな。読みものとしては。

「…………で? アンタはこの機会を逃したくはない訳だろ?」

「ええ。折角の転生ですので。貴方と私は謂わば感性を共にする同志なのですよ……!!」

「んー、じゃあ、さ。いっそ未練を無くして欲しい。『』という「自分」に関する記憶を消して欲しい。自分からも、この世界から」

「……それってかなりのポイント削りますよ?」

「自分にだって自分の生活があった。自分にも友達や家族がいたし、転生してしまったら懐かしく思うのも、帰りたいと思うのも辛いだけだ。いっそするなら楽しく生きたい。だから、心残りは消したい」

薄情な事を言っているな、と思う。転生したいな、と思ったとき、考えたりした事もあった。一番ネックなのは、もうこの世界に戻れない、という事だ。いくら魔法なんて魅力的なものを使えたとしても、この世界で生きていた、という記憶は消えない。

それが心残りになってしまいうぐらいならば、そう、ならばいっそ

消してしまえばいいと。自分で考えついたとき、思わず笑ってしまったが。

「…良いでしょう。そこら辺は神様の私です。人間の存在、事象を弄るのならばとても簡単な事です。この世界及び貴方の記憶から「この世界の貴方」という痕跡は消しましょう。ですが知識などはそのまま持って行って貰いますよ?」

「まあ、その方が楽しいんだろ?」

「ええ。勿論。同志以外の人間は世界を崩壊させない程度に和氣藹々とやってくれば神様としては何の問題もありませんので」

「へいへい、そうですかい」

平気で言っただけのける神様に思うところが無い訳じゃないが、それでもいいや、と思っている自分も大概、か。

「んじゃ、リセットしますんで。気を楽にしてください。——はあっ!」

「ええ!? 何そのハンマー!? ここってシリアスに呪文とかで決めるんじゃ——ゲフツツ!」

ハンマー…なんだその「リセットハンマー」って…どこから出したその巨大金槌…。

そんなツツコミをしながらも、俺の意識は次第に薄れていった…。

【設定を更新します】

【対象『 』。対象の世界の改竄を完了。デリート確認。対象の記憶、主に経歴に関する部分の記憶の消去を完了。知識及び経験の欠落は認められず】

【『 』のデータの書き換えを開始。∴対象の思考、趣向、傾向のデータから最適たる改竄結果を算出します】

【∴読込中∴】

【読込完了、情報の書き換えを実行します。作業開始。∴10%∴20%∴∴】

【∴∴95、96、97、98、99、100%、書き換え完了。

『 』の自身の体のアクセス権限を設定。条件及び限定状況下以外でのアクセス禁止領域の設定を確認】

【書き換え作業に異常は見られず。メイキングは完了】

【ゲートオープン。それでは『 』。どうか良い人生を。輪が娯楽の為に。そして貴方の幸せの為に。Good lac!~!】

「——と、言う訳でボクが生まれました」

「んなバカな話信じられるかーっ!!」

目の前には眼鏡をかけた少女がいる。年齢はまだおよそ中学生ぐらいだろう。髪を後ろで縛った、悪く言えば地味な少女。それが肩を怒らせて怒っている。：そんな怒られたってボクだって困るんだけどなあ。

「なんだ、どっかの、恐らくこの世界に類似した、っていうかこの世界が漫画で存在している世界からの転生者って!! 頭沸いてんのか!？」

「いやー、そういう設定だし。ねえ？」

「ねえ? じゃねえよ!! 返せ! 私の平穏!! 後パソコン!!」

「ごめん。ボクの媒体になっちゃってるみたいだから無理なんだよねー」

「くっそ、初音ミクなんてインストールするんじゃないかって…!! おかしい、とは思ってたんだよ、あの価格!! 思わず興味に吊られて買ってたけど!! っていうか何で買ったんだ私!？」

「それすらも策略だったのかもね。——で、そろそろ現実を受け入れてくれるかな? 長谷川千雨さん?」

肩を上下させて息をする少女、長谷川千雨さんにそう言う。

長谷川千雨。それは「魔法先生ネギま！」に出てくる登場人物で、変人揃いの登場人物の中で最も一般人に近い？　と言うべき少女か。認識阻害などの「変な事が起きても当たり前として受け止めてしまおう」などと言った、ある意味幻術とかに耐性を持っている少女だ。それ故に特異な麻帆良での生活で色々と孤立したり悩んだりしているよう、と「知識」の中から彼女に対する情報を引き出してみる。うん、まあ、知識通りの人みたいで、尚更この世界が「魔法先生ネギま！」の世界なんだなあ、と実感してしまう。

「うるさいっ！！　認められるか！！　こんな非現実！！　お前の設定も信じられねえよっ！！　何だ、唄って戦える実体化したヴォーカロイドって!？」

「いやあ、ボクもなんでこんな混じり混じりな設定なのかわからないしねえ」

そう。今のボクの姿は皆さんもご存じの「初音ミク」だ。声の方はどうにも喋る時は初音ミクの声を肉声のようにした感じだけど。

更に、それだけじゃなくどうにも「アルトネリコ」というゲームの「レーヴァテイル」の設定も加えられている。これがさっきの千雨さんの唄って戦える実体化したヴォーカロイドの実態である。外見は初音ミク、中身はレーヴァテイル。それが今のボクが存在だ。：あれ？　って事はボクのコスモスフィアがあって、その中で唄を紡ぐのかな？　今唄える唄、っていうか、戦闘に使える唄魔法ってのはなんか無さそうだし。うーん。

「もう寝る！　いっそ寝る、これは夢だ！！　目が覚めればお前は消えてる筈だ！！」

「まあ、いいけど。はい、おやすみー」

「おやすみー、じゃねえよ!!」

…何で、ボクこの人の所に転生なんてしちゃったんだろうなあ。
うーん、でもこの体、お腹とか空くのかなあ、やっぱり気になるや。

＊
＊
＊

——そうして、正史に紛れ込んだのは改竄された電子の歌姫。

「ねえ、千雨ー。ボクも学校に通いたいよー」

「無理言うな、ボケエツ!!」

——長谷川千雨と共に歩む事になった彼女の運命は。

「千雨、あのさ、ボクさ、実を言うと現状だと凄い無力で、唄う事しか出来ないんだよね。普通の魔法も習えば使えるかもだけど、やっぱり、唄魔法を使える方が良いと思うんだよね?」

「……で?」

「ボクにダイブしてみない？」

「お断りだっ！！」

——そして彼女は果たして唄を紡ぐ事が出来るのか。

「大丈夫。千雨はボクが護るから。だって君は……」

「ボク、唄うよ」

唄って踊れて戦える、そんなヴォーカロイドでレーヴァテイルな歌姫にボクはなりたい。

(後書き)

※作者の脳内は常にカオスでこんな突発的な妄想が出来あがったりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5646q/>

唄って踊って戦えるヴォーカロイドでレーヴァテイルな歌姫になりたい。

2011年2月1日15時40分発行